

# 山東京伝の読本に見られる「から」「からは」の用法

塚 本 泰 造

## はじめに

近世の文語文献には、文語による表現であるにも関わらず、接続助詞のようにふるまう「から」がしばしば見受けられる。先行研究によれば、すでに近世初期には「から」は当時の口語の接続助詞として成立していたようであるから、一見、奇妙な現象といえるわけである。

これは、単純に作者の不注意によつて、口語のことが文語の世界に紛れ込んだというものではないようである。詳しい論証は他稿に譲るが<sup>1)</sup>、その理由は端的には、富士谷御杖が『俳諧天爾波抄』(1807刊)において、

から からといふは、たゞよりの俗語のやうにおもふ人あれども、さにあらず古言に多くつかひたるてには也。…これに二例ありて、「名から」装からと云。「名からは物名をうけ「装からはよそひの詞をうくるを云、その「名からは、後世にもまゝつかふ也。いはゆる「宿から」「我からなどの類なり。抑このからといふ詞は、上古に、故の字をかれと訓じてよむ。即此心之。さればなに事にもあれ、その故をふまへとしてい

ふ詞なり。

と述べているように、国学者などの当時の学者たちが上代語も視野に入れた雅語の討究をするなかで、「から」が「より」の俗語ではなく、それどころかもともとは雅語であつたことが再発見されたためであると考えられる。そうでなければ、本居宣長が自身の著述のことは(擬古文)において、接続助詞のようにふるまう「から」をしばしばよく使う(例えば、『古事記伝』では139例、『玉勝間』では34例、『源氏物語玉の小櫛』では23例)現象が説明しにくいであらう<sup>2)</sup>。

筆者は、これまで本居宣長、賀茂真淵、富士谷成章、曲亭馬琴の文語文献を対象に、生きていた化石ともいえる接続助詞的な「から」及びその派生した連語「からは」「からに」の実態を調査してきた。今回は、馬琴と並ぶ読本の作者山東京伝をとりあげる。山東京伝はいわゆる「後期読本の魁であり画期的存在である」<sup>3)</sup>、『忠臣水滸伝』の作家であり、また考証随筆『骨董集』に見られるような民間学者としての一面もうかがえるからである。

なお、使用した本文は、「昔話稲妻表紙」は新日本古典文学大系本、それ以外の山東京伝の読本は『山東京伝全集』第十五巻く十七

巻（ぺりかん社）である。

## 一 山東京伝の「から」「からは」使用状況

山東京伝の全読本に見られる「から」「からは」「からに」の使用状況は表1に示す通りである。表中に「から（格）」とあるのは「今から」「口から」のように格助詞として使われているもの、「から（接）」とあるのは接続助詞的な「から」のことである。

表1

作 品	刊 行 年	から (格)	から (接)	からに	からは	うへは
画図通俗大聖殿	1790(寛政2)刊	0	0	0	0	0
忠臣水滸伝 前編	1799(寛政11年)刊行	0	0	0	0	0
忠臣水滸伝 後編	1801(享和元年)刊行	0	0	0	0	0
復讐奇談 安積沼	1803(享和3年)刊行	0	0	0	0	0
優曇華物語	1804(文化元年)刊行	4	0	0	0	0
桜姫全伝 曙草紙	1805(文化2年)刊行	2	0	0	2	0
善知安方忠義伝 前編	1806(文化3年)刊行	3	0	0	2	7
昔話稲妻表紙	1806(文化3年)刊行	3	4	0	2*	14
梅花氷裂	1807(文化4年)刊行	1	0	0	0	3
浮世牡丹全伝	1809(文化6年)刊行	3	0	0	3	3
稲妻表紙後編 本朝酔菩提全伝	1809(文化6年)刊行	13	4	1	3	4
双蝶記	1813(文化10年)刊行	11	0	0	0	8
計		37	8	1	12	25

\* 「さるからは」もここに含めた。

表1からは、山東京伝はあまり「から」を接続助詞的に使わなかったが全く無視したわけでもないこと、連語「からは」の方を「から（接）」より早くから使い始めていたことがわかる。「からに」は1例のみであるが、曲亭馬琴との比較考察のときに言及する。

山東京伝の使う、接続助詞的なぶるまいを見せる「から」8例を次に示す。傍線は筆者、上・下は上段下段の略。なお、読本の振り仮名は論証に支障のないかぎり、省略したところがある（以下同じ）。

うたふ<sup>しう</sup>唱<sup>しやう</sup>歌<sup>か</sup>も声くもり、ひくてもふるへてたしかならねど、さすが<sup>しやう</sup>目<sup>め</sup>来の手練といひ、此世のなごりと思ふ<sup>しやう</sup>から、苦しき息をばげませつゝ、三重の甲をあげ、初重の乙に収て、うたひすましたりければ、

昔話稲妻表紙 P252 地の文

主君とは申しながら、おそれおほくも心には、枕ぞひとも思ひし<sup>しやう</sup>から、烏帽子宝を産はべりて、唐の鏡とかしづかれ、おん身等にも安堵させ、たのしきくらしをさせ申んと、思ひし事も左り縄、

昔話稲妻表紙 P279 会話文

余寒をまして肌さむく、瀬田にかたふく日のかげも、西方浄土と思ふ<sup>しやう</sup>から、辛崎の松風も、常楽我浄ときこゆめり。

昔話稲妻表紙 P282 地の文

父うへのおん身のうへ気づかはしく、時節をまら、御勘気のゆるしをうけてたちかへり、家をおさめんと思ふ<sup>しやう</sup>から、おちこちをしをのびて、むなしく月日をおくりつるが、

昔話稲妻表紙 P292 会話文

不忠不孝の者の子と、かならずくしらせなよ。親の血筋と思

ふから、只大切なは其子なり。

稲妻表紙後編 本朝酔菩提全伝 P195上 会話文

盥の水に顔うつして、髪とりあぐる梳くしに、身を売物と思ふから、花を飜かざるぞ哀なる。

稲妻表紙後編 本朝酔菩提全伝 P202下 地の文

亭主はもろき病人の、これを余波あなみと思ふから、手さきもふるふ  
佐茶の湯、親子の縁の薄茶とも、しらでそなふる一服は、手向  
の水と冷ぬべし。

稲妻表紙後編 本朝酔菩提全伝 P206下 地の文

これらの用例からすれば、山東京伝は雅語「から」をそう自由には使えなかったということになる。なぜなら、7例中、「と思ふから」が6例、残り1例も「とも思ひしから」であり、他の動詞に自由に付けるでもなく、ほとんど固定した用法をとっているからである。また、地の文が4例、会話文が4例であるから、口語の側に属することばとして意識して使っていたとも言えない。これは後に述べる「からは」とは対照的な点である。

ただ次の1例のみ、明らかに接続助詞であり、また口語としての用法を見せている。

白眼よ、そちは邪よこしま闕あやまじやから、筭たけの番が相応じや。

稲妻表紙後編 本朝酔菩提全伝 P253上 会話文

しかしこれは、『稲妻表紙後編 本朝酔菩提全伝』の登場人物の一人、山奥に住む「櫻倉邪見の老女」の、特定の場面の発話（あるいは長ぜりふ）の中にのみ見られるものである。この箇所を含む発

話の部分引用する。

これ竈の前の小女郎ども、なぜ此様にけふらしおる。目があかれぬはどうするのぢや。無益に薪を費すな。食物あつかふ傍で風ひらふな。汚穢きたまこと知おらぬか。これ伊勢平氏よ、そちは目がすがみたれば、青菜を撰ば臉おしあけて、山蛭やまづみに気をつけよ。∴紅を唾つばでとくなたはけめ。咀路くろよ、額刺かぶつけたか、氣疎けそすな。冬野よ、よく髪を梳くしてやれ、梳櫛くしの齒はをかくな」と、口速くちやくに嘯うそつゝ、

稲妻表紙後編 本朝酔菩提全伝 P252下～253上

このようにこの箇所の「から」は、全体が口語調で毒づく場面に使われており、他の7例とは異質の「から」であると言える。この老女は他の場面では「汝は何ゆゑおそかりしぞ。わづか一桶の水を汲くみに、一時三時かゝるべき道理やある」（P258下）というように普通の文語調に戻っている。

残念ながら、「から」ということばそのものに対する山東京伝の言及箇所をまだ発見できていない。しかし、少なくともこうした固定した使い方からして、口語としての接続助詞「から」をそのまま作品の中に導入したとは言にくいと考えられる。

さて、「から」より派生した連語「からは」は、「から」よりも多くかつ早く使われている。その使用状況はどうであろうか。

## 二 「からは」の盛行と衰退

接続助詞的な「から」より派生した連語「からは」（用言に接続）は吉川泰雄（1977）によれば、室町後期頃に成立し、上代中古

の和文には見られないものである。こうした「からは」を雅語として使うならば、それは誤用であり、かつ上代中古の雅語では表現し得ない、新しい表現を担っていたがための使用ということになる。事実、賀茂真淵は「からは」を自身の著述において論証の表現として常用している(文献数21で183例使用)。

山東京伝の使用した「からは」を次に示す。

比興至極の答かな。おん身両刀をおぶるからは、すこしは武夫の道をも、わきまへつらん。

優曇華物語 P487上 会話文

おん身を妻とするからは、我為にも舅の仇なり、いかでかよそに見なさんや。

優曇華物語 P487下 会話文

世に希なる此尾長蝦蟇を持からは、伝へ聞蝦蟇つかひの賊にまざれなし。

桜姫全伝 曙草紙 P77上 会話文

なほ怨恨いやまさり、とても地獄に墮すからは、永く祟をなして仇を報い、恨をはるげばやと、

桜姫全伝 曙草紙 P152上 会話文

かく捕へたるからは、とても生てはもどすまじ。

善知安方忠義伝 前編 P295下 会話文

奇妙の術を得玉ふうへに、官印御旗あるからは、味方を集る便十分なり。

善知安方忠義伝 前編 P324下 会話文

おん身三本傘の紋つけ玉ふからは、若名古屋山三郎どものにはあらすや

昔話稲妻表紙 P326 会話文

数箇の人前にてかく恥辱をうけたるからは、益堪忍なりがたし。

浮牡丹全伝 P55下 会話文

拙者彼所へ参るからは、御主人いかにのたまふとも、危き時は御助太刀仕りて、恙なく御飯宅あるやうに仕候はん。

浮牡丹全伝 P59下 会話文

ことさら放ちやるにしのびずといへども、汝につれそふからはこれも又せんすべなし

浮牡丹全伝 P65上 会話文

此に居らざるからは、彼が身の代百両を残らず中取して、夫婦ともに何方へも逃退にしかじ。

稲妻表紙後編 本朝酔善提全伝 P202下 会話文

とても此地を逃退からは、何するとも妨なし。

稲妻表紙後編 本朝酔善提全伝 P210下 会話文

父うへ殺生をやめ給ふからは、狩犬も用なきものなり。

稲妻表紙後編 本朝酔善提全伝 P217上 会話文

「ざるからは」の例は次の1例である。

それがしも左こそ存候へ。ざるからは片時も猶予はよろしからず。

昔話稲妻表紙 P261 会話文

全ての「からは」が会話文に使われているから、同じ文話の中でも「からは」は口語性の強いことばとして使われていたことがわかる。

意味としては「スル以上ハ」に相当するものであつて、前件を、後件に示す事態の必然条件とする点で特に異なつた用法とは言えない。ただ、上代中古のことばでのみ記すべきであるという基準を、仮に近世文語の全体に設けるならば、「からは」は異質である。けれども、表現領域を補う上で、やむを得ず使つた可能性が高いと言える。

問題は「からは」に相当する、より古いことばが他にないかということである。そして、表1が示すように、そのより適したことばに「うへは」があつたと考えられる。「うへは」の用例を次に示す。

老熊は此時酒の酔全く醒けるがかれらを殺せしうへは、とても当所の住ひなりがたし、夜のあけぬ間に逃ゆかばやと心をさだめ、

善知安方忠義伝 前編 P 2 4 6 下 心中語

とても御聞入なきうへは、兼ての覚悟なり

善知安方忠義伝 前編 P 2 6 3 上 会話文

親人のおん免しあるうへは、唐衣どのさへ得心あらば、いかでか背きはべらん

善知安方忠義伝 前編 P 2 8 3 下 会話文

さはいかにいふともうけひかずや、然るうへはせんすべなし。

善知安方忠義伝 前編 P 2 9 6 上 会話文

かく計の奥妙なるを見奉るうへは、いかでか違背つかまつらん。

善知安方忠義伝 前編 P 3 5 0 上 会話文

事あらはるうへは是非におよばず

善知安方忠義伝 前編 P 3 5 5 上 会話文

陰謀半にして露顕し、姉うへ自害あるうへは、とても本望とげ

がたし。

善知安方忠義伝 前編 P 3 6 9 上 会話文

かくなるうへはあきらかに姉うへと名のりてたべ。

梅花氷裂 P 6 6 2 下 会話文

親子一所に相果て敵の血筋をたつうへは、姉うへにか、はりなし。

梅花氷裂 P 6 6 7 下 会話文

敵叢丈太が在所しるうへは猶予しがたし。

梅花氷裂 P 6 6 8 上 会話文

名画を失ふはおしむべき事なれども、妖をなすうへはせんすべなし、

浮牡丹全伝 p 4 7 上 会話文

かく事明白になりつるうへは、其事もつゝまず語申すべし。

浮牡丹全伝 P 1 2 6 下 会話文

これを八重垣が身の穢を清る料錢として汝等につかはすべし。

しかるうへは一言のいふべき事あるべからず。

浮牡丹全伝 P 1 2 7 下 会話文

かくなるうへは婿舅の間なれば、いかでか僥略に扱ふべき。

稲妻表紙後編 本朝酔善提全伝 P 1 9 2 上 会話文

かく明白なるうへは逃るゝ道はあるべからず。

稲妻表紙後編 本朝酔善提全伝 P 2 7 1 下 会話文

汝悟道をきはめしうへは、僧形俗体の差別なし。

稲妻表紙後編 本朝酔善提全伝 P 2 9 6 上 会話文

かくいましめられたるうへは、いつはるともゆるすまじ。

稲妻表紙後編 本朝酔善提全伝 P 3 8 7 上 会話文

已に大将うせさせ給ふうへは、我一人生とまりて何かせん、

証文を渡せしうへは、<sup>つぎ</sup>連行事はしばし猶予をしてたび候へ  
 双蝶記 P 4 7 8 下 会話文

おひく味方集るうへは、<sup>う</sup>時節を窺義兵の旗をひるがへし、多  
 年の蟄糧をひらくべし。  
 双蝶記 P 4 9 3 上 会話文

一旦君にするうへは』と思ふにぞ  
 双蝶記 P 4 9 8 下 会話文

郎の<sup>おの</sup>計ずでに成ぬる上は、<sup>は</sup>もはやおん名をあかし給はれかしと  
 いふ。  
 双蝶記 P 4 9 9 下 心中語

同家中<sup>は</sup>齊元氏の女と聞うへはそなたの身をあやまたしてはなほ  
 さらに義理たゝねば、  
 双蝶記 P 5 1 2 上 会話文

活首を買入の証書を出せしうへは、<sup>は</sup>今更悔てかへらぬこと、  
 双蝶記 P 5 3 6 下 会話文

此金を戻すうへは<sup>は</sup>露ばかりも思はなし  
 双蝶記 P 5 5 0 下 会話文

双蝶記 P 5 5 2 上 会話文

いずれも、意味は「うへは」に当たり、また会話文・心中語で使われているので、そのまま「からは」と入れ替えてもよいということになる。また、「此うへは」（稲妻表紙後編 本朝酔菩提全伝 4 3 5 下）「覚悟のうへは」（梅花氷裂 6 6 3 下・6 6 6 上）「隠謀露頭の上へは」（双蝶記 P 5 2 3 下）というように、体言を承けることもでき、「うへは」の方が「からは」より使える範囲が広い。さらに成立年代も「うへは」の方が古く（中世の軍記物語に用

例あり）、文語の中での、いわば適者生存からいえば、両者が共存した場合、「うへは」に軍配が上がりやすかつたわけである。表 1 は「からは」より「うへは」を使う傾向を示している。

以上をまとめると、山東京伝は読本のことばとして、接続助詞的なふるまいをする雅語「から」を使うには使つたが、固定的な用法でのみ作品の中に導き入れるしかなかった。一方その連語「からは」も文語の中の口語性の強いことばとして地位を占めていたが、古さと使用域の差から「うへは」に取つて代わられた。いずれも表現の札として導入はしたものの、消極的な用法しか残さなかったと言えるであろう。

次に、同時期の読本作者によるものとして、曲亭馬琴の作品に見られる「から」と比べてみよう。

### 三 馬琴との違い

曲亭馬琴の読本では、接続助詞的なふるまいを見せる「から」及びその連語は、どのような使用状況を示しているであろうか。その状況を表 2 に示す。

表 2

作 品	から(後)	からに	からは
椿説弓張月 (1807~1811刊)	17	3	3
南総里見八犬伝 (1814~1841刊)	13	14	9
近世説美少年録 (1829~1832刊)	3	0	1
開巻驚奇侠客伝 第一~四集 (1832~1835刊)	6	2	4
新局玉石童子訓 (1845~1848刊)	2	3	0
計	41	22	17

\*八犬伝の「から」には引用 1 例を含む。

なお、『椿説弓張月』は日本古典文学大系、『南総里見八犬伝』は岩波文庫（1990改版本）、『近世説美少年録』『新島玉石童子訓』は新編日本古典文学全集本、『開卷驚奇俠客伝 第一〜四集』は新日本古典文学大系本を使用した。

馬琴の詳しい使用状況は他稿に譲り、山東京伝の使った「から(接)」「からは」にしばって比べてみると、使用数の推移からして、曲亭馬琴も雅語「から」を作品のこばに導き入れはしたものの、読本の先輩である京伝と同じくこれらのこばを使うことに対して消極的になったと考えられる。

しかし、大きな違いは、曲亭馬琴が「からに」を積極的に使ったことである。

山東京伝の1例は次のようなものである。

此商売をするからに、愁を聞は常なれど、熟浮世を觀するに、  
稲妻表紙後編 本朝酔善提全伝 p292上

馬琴の「からに」の使用例を見ると、その違いの大元は「からに」に「間に」という表記が見られること、言い換えれば、馬琴の方が「から」に対してより積極的な語の解釈をもつて、いわば存在理由をしっかりとつて導き入れたことにあると考えられる。「から」には理由原因の接続の意味もあるけれども、それだけでなく、間という時間の介入の余地のある体言相当のものとしても把握しており、そのため「から」のみならず「からに」にも手を伸ばすことができたようである。若干の例を示す。

同胞しばし、母の傍を離れし間に、いと怪しき老女が為に、母

親を殺され、胎内の児さへ、彼老婆が奪ひ去たり、  
椿説弓張月・下・p116

勝元・宗全が毎の、兵乱十一年に及びし間に、公家武家俱に衰へて、京師は京師の像くならず。

南総里見八犬伝・七・p447

慙りし間に彼岸は、這日も漆に立出て、

開卷驚奇俠客伝 第一〜四集 p374上

松煙斎季彦の、迷懷を聞く間に、いよく恥て

新島玉石童子訓 p410

「から」のみで漢字表記「間」を持つものもある。

今宵必退治して、人の迷ひを醒さまく、欲せし間(から)の方便なり。

南総里見八犬伝・五・p101

勤業なき夜を守る間(から)、やうやく氣は倦心疲れて、

南総里見八犬伝・六・p161

犬江主はけふ遭際、初対面で侍る間(から)、知らせ給はぬは理りなり。

南総里見八犬伝・七・p24

また、馬琴の「から」使用は、山東京伝の「から(接)」のように「と思ふ」にのみ承接するようない方を見せていない。

以上の状況を「から(接)」という表現の札の使用法からまとめてみると、両者とも同じ雅語としてとらえてはいたものの、消極的に導入した山東京伝より、馬琴の方が「間」という表記に示される

解釈をもつて、連語も含めて幅広く、作品のことばの世界に導入したわけである。そのことばの世界において「から」（及びその連語）の占める領域は、同じ運命を辿ったにせよ、馬琴の方が広がったわけである。

## おわりに

以上、山東京伝の読本に見える接続助詞的な「から」およびその派生である連語「からは」「からに」の使用実態について述べてきた。要点を示すと

- ・山東京伝の読本に見える接続助詞的なふるまいを示す「から」は、口語そのままでなく、雅語として導入された可能性が高い。その使用が「と思ふ」に承接する用法に偏っているからである。
- ・「からは」は文語による作品世界の中の、口語性の強いことばとして、複文でそれなりの位置を占めていたが、「うへは」にとつて代わられた。
- ・曲亭馬琴の「から」には「間」という漢字表記とその解釈に見合う用法が見られるが、山東京伝には見られない。
- ・両者のこのことばに対する価値の差を示すのが「からに」の使用数である。

## 参考文献

- 塚本泰造（2001）「本居宣長の著述（擬古文）に見られる「から」について」追野虔徳編『筑紫語学論叢』（風間書房）
- 塚本泰造（2002）「賀茂真淵の著述（擬古文）に見られる「から」系のことば」『国語国文学研究』第三十七号

- 塚本泰造（2003）「「から（に）」をめぐる解釈史から—近世の語法書を中心に—」『宮崎女子短期大学紀要』二十九号
- 塚本泰造（2006）「馬琴の文語に見られる「から（に）」が意味するもの—「から」をめぐる言説とその影響—」『国語国文学研究』第四十一号
- 徳田武（2003）「解題」『山東京傳全集第十七巻読本3』、ぺりかん社
- 横山邦治（1992）「読本大概」『新日本古典文学大系80「解説」、岩波書店
- 吉川泰雄（1977）「接続助詞「から」と慣用語「からは」」『近代語誌』角川書店

## 注

- <sup>1</sup> 塚本（2003）（2006）を参照されたい。
- <sup>2</sup> 『新編富士谷御杖全集 第七巻』（思文閣）p517～519
- <sup>3</sup> 詳しくは塚本（2001）を参照されたい。
- <sup>4</sup> 横山邦治（1992）
- <sup>5</sup> 例えば、京伝は考証のために宣長の『玉勝間』『古事記伝』を参照している（『日本随筆大成 第一期』第15巻、p486）。
- <sup>6</sup> 唐突に口語調の場面が導入された事情については、『双蝶記』についてではあるが、曲亭馬琴が批判する、婦女俗客に喜ばれるように雑劇の趣に倣って、山東京伝が読本の面目を改めようとしたという徳田武（2003）の指摘（『山東京傳全集第十七巻読本3』「解題」p693～694）が参考になる。
- <sup>7</sup> 吉川泰雄（1977）「接続助詞「から」と慣用語「からは」」『近代語誌』角川書店
- <sup>8</sup> 詳しくは塚本（2002）を参照されたい。



<sup>9</sup> 『開巻驚奇俠各伝 第一〜四集』を除く、馬琴の詳しい使用状況は塚本  
(2006)を参照されたい。

<sup>10</sup> 注9に同じ。